

中村俊定文庫  
文庫 18  
333





新六歌仙

全

宝  
六

存  
義  
橋  
川

祇  
王  
雞  
口

買  
明  
由  
林

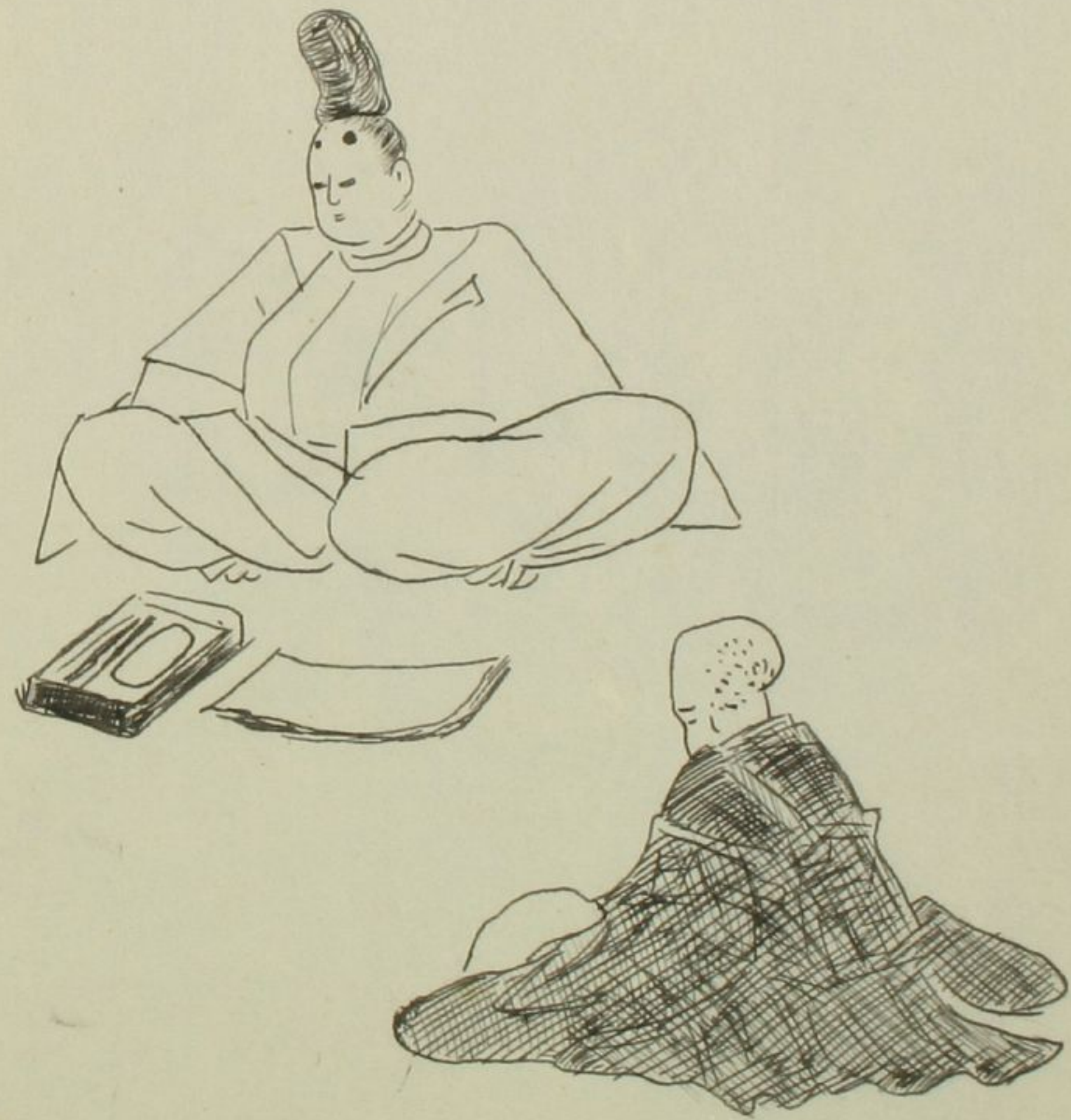
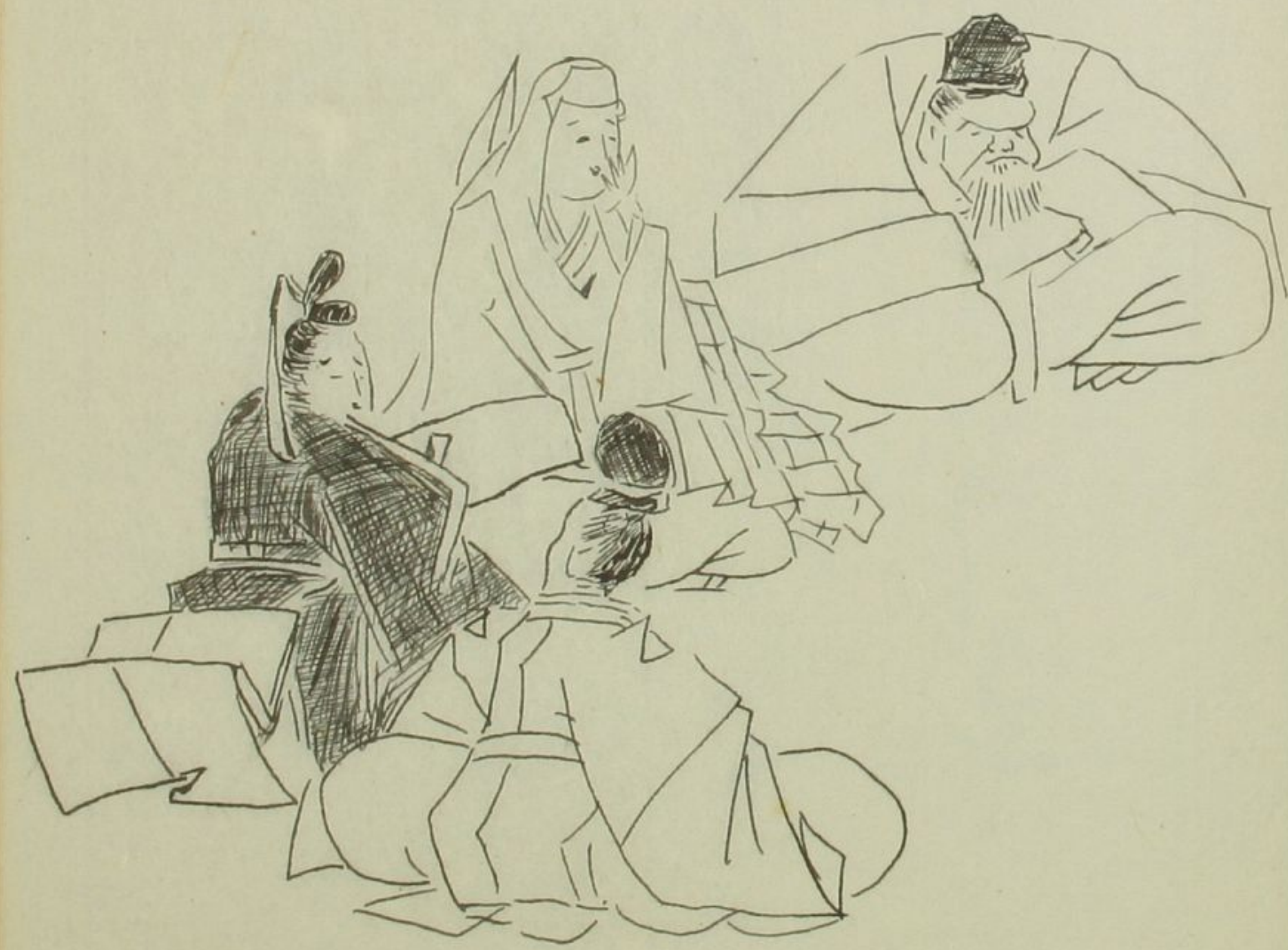




李井庵存義  
 須臾庵祇丞  
 獨步庵買明  
 木樨庵樓川  
 獅子眠雞口  
 弋棒庵由林







後系信魚圖模寫



良經

むく誰かおさくこれ  
おぼくへておれを  
えはの心とすしん

稻吟

今も赤むくし母なるんさくさく苗  
昔の記念より我旅の心  
いさよき記念と鳥賊和て  
門の障子乃様ゆるみりり  
稲妻の大地へ落る蝕の扱  
虎の心も秋萩原の 約  
存義



ウ  
年暮る足かきみ乃小智狩  
い<sup>膳</sup>や吞つらんめらる欠く酒  
祝言も火より比み来りて  
われのみえへる身成るもむ  
松風みつれて病始發りて  
庚申塚より駕きつるなり  
君り代や金じりてをばりて  
阿毛のうちかきむそ

ひききて車二輛乃ひとやとり  
大いむらりりととるんせ冠者  
月も川越へぬる衣の裾  
芝より志がみの赤起りて  
ナ  
唯確の雛子か<sup>卯</sup>とて運ぶ智恵をえて  
木の川み恥るぬき人の面  
阿字観子幾夜に傳のうちに寐は  
麦搦比と音形一の山







慈園

深山路やらう

秋のいづろん

とさるしきき乃

夕ぐれ也心宿

猫吟

深山路や足さぬ雪冬秋の僻

月のあやうき松枝も猿の子

のさるの路るは酔み風よきて

りふの<sup>可</sup>と目結ふなりみ出る

非冬儀の浅く住るは菘換

かち里くと路ハ小梅乾

祇丞



踏<sup>ウ</sup>の火乃あゝきく<sup>ウ</sup>五月周  
文乃言さし一乃 孝道  
答膳の百を教我より是母  
雪を清きておし 庭石  
松くくり師老の月よ景色をみ  
我我繪みしと又も持君  
記念の茶梅及魂まると大るかり  
あられいくき嘆我のかり住

碧も山をほのめいと負猪  
初旅人の連舟あましく  
お借すし管へも初より記念の比  
極の上あそび居虫這出る  
昔三月酒田能芝居るしか地  
おちつたなり也実方の事  
朝ふく雑木女をうまむく産  
社をいぐる聖女縁日



何とせんたのみかた方此地を籠  
心々觸みかしくはるまゝ  
そこ爰と数舟一箇の舟に來て  
とち〜付まのち〜きん空  
後者っ子み貞じと使を懐習〜い  
廣紫を敷て餅よあまつ  
月のお作乃欄うちけ〜  
ふみか〜ふ萩の起り〜

凡隨者のよなう是る〜きり〜  
油草つみみ笈を捨〜  
鈴の後きこゆまゝ醒隣  
茶をぢ〜と滑稽哉やる  
群集まゝ花み白衣の頭の敷  
酌の清色いやよいのや海



復成

言少はみよの

まのさうた

うめれて

月子みらる

あはれかこや

いやし心お成詠る、お侍

さすゝ燕おの屋乃語里

鯛ひめ花くくもききりて

あまそのまゝあはく喜柳

羽虫扱く鶴色長閑み隅田川

久しあうみく驟句あそい寸

そ後くと首昌利やういさうかま

罪も報とたう旅籠喰ふ



まつちりちる良形都の志和  
也とい初のほとき守らな  
道灌ハ聖武軍一子机  
漸あつく又自子蘭形香  
逢ぬ扱わころ形月もつほぬ  
蛇籠通く志津のこころ  
網崎母家れ志の籠り  
されたの畑乃人哉あつく

この比の言さの種糸玉  
去年あ十日とえや記杜支魚  
幸あゝの幾代孫あらん一攝  
濠守乃志尺量満一甲あ  
飛ふくくくくくくくくく  
物あさくくくくくくくくく



西行

年ふとしてあは  
誠庵しと  
おかしきや  
いぢち  
なまきり  
とやのふりかむ

招吟

樓川

誠庵しとあはきやふ西行忌  
いのちまをりり 宛成ゆる蛇  
戸障子みやし海の子葉焦れ来て  
ためなまきりみ籠る能所  
賜の酒みまきし能胸子目  
舟さし入る旅のぬそりき



ウ  
狢哉泊る毘掛る寸御小屋  
里能栄を贄施へるより  
鳥帽子着る舞屋連母仰れて  
朽て糸更し舞の神の魚  
葦狩乃あれを告表夕鴉  
洞能茶阿乃縁日の月  
稲妻の世み瀬の死ぬるを  
三とせ隔つる玉哉知る大

う〜と南追子能杉かさ里  
矢社哉花の板老みき  
妻能母僕るむし物語  
庭子の昼寐其も白子を  
ナ  
見りし能山ハ曾根太郎曾根次郎  
あ〜ををれ〜十月の夏  
根枝哉捨てむすへる茶の庵  
男を鬼と詠かへささや



弓杖み尻うち糸よいしき世  
悲さ満くけ能毎ふく口  
角能糊摺れと啼く菽垣子  
毛色哉とけて約幸能爾  
ハ約や月能照る際を賭して  
折れ不後け乃忘白ふ蘭  
風輦み孝ある民を養をさり  
禮を棧みかろ能 並葉

古寺の破去みさるよ櫓の蟻  
いつ々名みなる流の夕物(陽)  
急の雲松と楳もあうりり  
海言哉まゝ其琵琶坊り魚  
喜なく雑の敷白と鴉しき  
又年始りてかきまこの旅



定家

あけおほの

なうとこと

ききぬ

かきく月

ききぬ

招吟

新をききの

胸うち含ぬ

松言ね

雲と見る

茶漬の初

推さる

鶏口



ウ  
ゆゑに合茶乃の意味は掛緒にて  
新法語く 風 心 燈  
貝薩子切なる中哉さく避親系  
く口詩姑一旬みしる泣く泣く  
何女へそ狐付けの山まく  
月のち記おる螢浅るお  
いとさうさふ々峰をう満こ  
母おくおれを藤張の弓

閑を憂へ火宅哉おし人の心  
きしる襖おれおさう母堂  
都色も此日あほ里おれおれ  
东风の吹消をぬけおれ明星  
ナ  
たぐ振るはるあさるは雛子り啼  
志深とき我祝お里おれ棟上  
誓目女お子の杖おれおれ来り  
我お倦く日お昼も夕暮



申しくみたよと鴻の玉まじり  
いつ種哉尺さる岩間田の稲  
さる種外一丈て館む月の宵  
おかひいし約志はまつくときく  
浮橋の柱は草やなぬへに  
く葉師さきく一尺をなれ教ち里居る  
長唄ハ梅のさあかさ卦みきく  
さる往りぬふ山流乃美

さきくろみ旭をうけて賽は神  
糊りひるる布子ぬくれつ  
米のさ大津袋み猫志をう  
まのさるさおま 廿部  
みおとく陰哉花よう紅糸を架  
いとさめてさくいとける記志



家陸

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

空母に成りて一人の豆

さむくもるをくれ翁を遣ふ

濱篋は赤魚の面紙浅き出さく

茶土画かきまて成にほえたる家

栞く姑嘗初の喜自根み深す

もやうち止しぬ継おあうく

猫吟

由林







唐音哉符情よい子も志をん  
手なうつまてみ成就する室亭  
尺とせハ多仙富葱ほけけ  
友のあちとら沖を甚れぬよ  
麻衣むきふに潜る袖たれと  
是に志ろく一箱せんあと  
通里筋西の店下青月自款  
露はろく〜み巻上の砂利

ひさしに書哉よあむのかと使  
知ぬえまこと懐田乃餅  
取出を袋み探る琵琶乃汗  
みま亭等折所あ〜顔なる  
さ〜紙を花み苗産のんをえ  
枝折同けハ舞上げを蝶



十月廿五日

式棒庵興行

題千鳥

寫し繪の湖啼んきちと季	存義
万石の島越尺かくもふと里りな	祇丞
かまゝ祢乃下此園ちり小坂子為	買明
温泉をありも涌多つ伊豆此御式	樓川
鐘をくささあまくちとらうり那	雑口
粒ちとを啼てさけしきふちりな	由林



探題

時雨 山中 生海原  
炉開 蒲團 大根引

物買して京の時雨のやと里うを 李井  
 分別のうへみ置する路中の那 須吏  
 多底生海原あさるふまこ哉 獨歩  
 蛸いりきや足らぬ乃々客のとう 道具 木樺  
 折里えきつ旅人ゆく三布婦とん 獅子  
 とむさ着るく世等にまらぬ大根引 式棒

十月十日

獅子眠興行

題と負頃講

次の間ハ坊々お客そ急い寸講 存義  
 南天哉花又ふれりう急い寸講 祇丞  
 浪のうへみ置負に講あり大漆 買明  
 鯛の聲の源ハとせよと負に講 樓川  
 三男共うあかむむ里や急い寸講 由林  
 腰ぬけの縄を洒のめ急い寸講 雞口



標題 巨燈 津の島 山景  
河豚 夜鳥引 枯壁

子母めつ山猫唄の巨燈の形 李井  
面舎里苔めぬころや津草の月 須臾  
山茶花の意乃切歯や四五時半 獨歩  
弘法毒の歌あし河豚汁 木樺  
白犬犬子圍残まきよ夜鳥引 式棒  
出る月や入れも枯壁の海里有 獅子

十月廿六日

李井庵興行

題名至

天地の室哉おれや冬玉梅 祇丞  
光陰の一里塚見よ冬玉梅 買明  
禰林の雪おそれ冬玉梅 樓川  
冬玉梅日見もや柳如芽能動き 雞口  
冬玉もや日脚のこっハ餅まきを 由林  
風の小々 他教本の芽也 存義



探題 葛麦湯 冬田 紙衣  
霜 水柱 楮

雪津の神哉い之々葛麦湯哉 須史  
冬乃々田始ふくく山道くふ 獨歩  
定紋子又拾々收々紙衣哉 木樨  
朝くの葉や恙嘆く蓮の莖 獅子  
酸さめ枝いと枝を折る水柱な 式棒  
舎くく衣も楮の匂いりあ 李井

霜月十日

木樨菴興行

題鉢扣

胡惱の犬も唱へも鉢きこき 存義  
瓢子哉方鉢法ア合や鉢多々死 祇丞  
鉢扣夢みも武士み逢ぬなあ子 買明  
あつし哉あみゆらせ地鉢々き 鶏口  
鉢ききりとりやゆけ乃烏丸 由林  
立君此著賢々見ぬ鉢た々哉 樓川



探題

冬至 細代 寒

ぬくも 較 ぬ仙

冬玉うさ目みぬ秋を川とあり

李井

茶み流れて細代も魚や京迄里

須史

木津川の人吹さく流さむさうさ

獨歩

ぬくも冬を明月やちくくさ

獅子

沖中や北斗に向ふ較の流る

戈棒

ぬ仙や雲の奴れ中子たつ

木樺

霜月廿六日

獨歩菴興行

題炭

かゝ松やぬみちまを福つ池田炭

存義

松梅と松ありてあゝ連斗里炭

祇丞

松の戸能結人ハ耳以炭我友

樓川

こゝ流ぬて紐て家々やまハ里炭

雞口

炭賣や那智能流流斗不音

由林

炭山やあゝあゝか尻明け鳥

買明



探題 冬籠 火焼 氷  
火桶 鴛 念仏

きう猿や葉まいたさるるわこり  
才子阿通拙く庭掃く火焼丸 李井  
尾鱗とれたおみ籠乃道いり子 木樺  
土性の魂いさう火桶の那 獅子  
鈕羽茂こころみ持や鴛鴦妻 弋棒  
木母古の向ふも洗や念仏 獨歩

十二月十日

須史庵興行

題 臘ハ

臘ハみせめく志神よ軒の笈 存義  
臘ハやふおわらう香餅 買明  
臘ハや新日顔心を称迎ふ獄 樓川  
臘ハや園の別れを明けの星 鶏口  
臘ハみ抱難炊や觀無量 由林  
臘ハや多屋り功の尺やと記 祇丞



題守歳

酒汲む年々もさもさう物忘れ  
 李井  
 おととや人如恨とぬ花鳥川  
 獨歩  
 日成繫く鎖あるや古き市  
 木樨  
 待惜む阿咩<sup>立</sup>み<sup>立</sup>や年の関  
 獅子  
 月吾や田中の家も蝶こもる  
 式棒  
 人あまに不人おなま師走山  
 須臾

寶曆五乙亥年正月 李井庵興行

歳旦

をとめはく除福う歌や初雑煮  
 祇丞  
 此は唐みし咲以美乃美  
 買明  
 老子はく算盤くけ忘の書  
 樓川  
 青田や明く鐘越をくへる  
 雞口  
 初雞や冬を控鐘平の底  
 由林  
 いま春は小槌をくく四方は人  
 存義



探題 海苔 薺 風中  
木芽 薺 萩 雪宵

海苔瀧や漢村ふるも法乃乃  
三人う三人苦記野老う子  
罪もなく尺也るや崎乃いさ  
僧正孫名子板の木の芽う那  
雲の扱や流る音ハ峰の音  
旅人忠きせる集らん者百より  
須史 獨歩 木樺 獅子 弋棒 李井

正月廿日

獅子眠興行

題蝶

旅駕みいりる休夢を却蝶うな  
蝶を海陸越帆の村日和う形  
蝶く虫始を志後う素野  
蝶く孫名や薺ん午乃貝  
犯ふと二羽みさうての故蝶哉  
つゆ蘇にい老もやうつ故蝶う奈  
存義 祇丞 買明 樓川 由林 雞口



探題  
統月 涅槃舎の息  
薪能 燒燈 接木

統月障子に教方何〜そ 李井  
涅槃舎や教入交みあぬ〜り 須史  
志〜息と耳は〜く 獨歩  
思ひ心を威徳路や雄子の志 木樺  
燒燈尺の里能りや〜と字もや 式棒  
あま〜神と緒控の木やま〜子立 獅子

二月十日

式棒庵興行

題菜花

灰小屋又菜の志乃咲錦里々り 存義  
菜能志や灵山〜能 全世界 祇丞  
菜の花や何〜路あり井山の里 買明  
菜乃志や夜々四角子能る者 樓川  
菜能花や紫雲紅雲これと仙 雞口  
菜の志や油々木能筆く理語 由林



探題 四螺 蜂 陶 厂  
彼 春 松 去 極

侘 存 へ に 蛙 の 申 哉 多 け け け 前  
蜂 の 葉 や 漆 木 花 け け け 山  
歸 へ 層 來 へ 時 け け け 武  
松 登 此 峠 の 寺 や 彼 春 隆  
夕 暮 れ や 雨 ぐ ぐ ぐ け 松  
氣 力 未 だ 柳 哉 笑 へ へ 松  
李 井  
須 吏  
獨 歩  
木 樺  
獅 子  
弋 棒

二月廿六日 木樺庵興行

題花

夕花 总志 夕 夕 探 寺 あり 哉 存 義  
昼花 日も いる や 暮 け け 松 也 祇 丞  
夜花 暮 へ 鐘 を 撞 へ 仕 事 け 松 也 買 明  
風花 山 路 や 雪 け 吹 け 花 の 老 雞 口  
朝花 日 々 の 川 と 大 木 ぬ 間 や 花 の 風 由 林  
雨花 总 志 へ 羅 紗 の 合 羽 の 葉 山 子 哉 樓 川







探題

山吹茶摘 御方拭  
浄生山 海棠 美帖

石女を山吹の面乃舎 <sub>ア</sub> リ <sub>ナ</sub>	李井
きのふとを茶摘 <sub>ニ</sub> 子 <sub>ノ</sub> のむ <sub>ク</sub> 也	須史
御方拭七面二分のむ <sub>ク</sub> 也	木樺
狩 <sub>ク</sub> て入 <sub>ル</sub> や浄生乃裸 <sub>ヤ</sub> 肉	獅子
海棠に <sub>ハ</sub> 也 <sub>ク</sub> や杜子美 <sub>ノ</sub> 詩 <sub>ヲ</sub> さ <sub>シ</sub> ん	式棒
汲帖や嗟 <sub>ハ</sub> 味 <sub>ノ</sub> の奥 <sub>ニ</sub> ある <sub>ル</sub> も <sub>ト</sub> 能 <sub>ク</sub> 底	獨歩

三月廿六日

須史庵興行

題牡丹

岩角み <sub>く</sub> 尺 <sub>ハ</sub> 能 <sub>ク</sub> 能 <sub>ク</sub> 牡丹 <sub>ヲ</sub> 那	存義
日能 <sub>ク</sub> あ <sub>ま</sub> る <sub>ル</sub> 花 <sub>ノ</sub> 若 <sub>ク</sub> も <sub>ト</sub> む <sub>ク</sub> 也	買明
惜 <sub>ま</sub> る <sub>ル</sub> も <sub>ト</sub> 蝇 <sub>乃</sub> は <sub>ハ</sub> 免 <sub>ヤ</sub> 白牡丹	樓川
蝶 <sub>あ</sub> る <sub>ル</sub> 獅子 <sub>阿</sub> 季 <sub>を</sub> あ <sub>く</sub> 牡丹 <sub>は</sub> 能 <sub>ク</sub> も <sub>ト</sub>	雞口
二掃 <sub>と</sub> も <sub>ト</sub> 浮世 <sub>ノ</sub> の <sub>欲</sub> 乃 <sub>牡丹</sub> も <sub>ト</sub>	由林
一掃 <sub>も</sub> 牡丹 <sub>哉</sub> め <sub>く</sub> る <sub>ル</sub> 葉 <sub>内</sub> 也	祇丞



探題

杜若 かんき 鶯舟  
短歌 鶯と 郭公

かきつをへ 蛭ふをへく 田よりま

李井

大さ哉二羽く 流きやかんこ香

獨歩

鼻つまむ 岡み 綉哉 画く 鶯舟哉

木樺

みへおやへく 在 虫のふをさ 火

獅子

日あへく へに 蠅とく 蜘蛛の手 造哉

式棒

そつものや 海河産ある ばと ぎす

須臾

四月十日

李井庵興行

題賞

石川のふを音み 持つ 量うあ

祇丞

聞を憂へ 管能 例能 朝日山

買明

追ふ人 ぬり 王哉 尺を 数管うな

樓川

朝六つ 乃 橋よ かく 管う 水

鶏口

いと 技忠 岡を せ ち ねる 管哉

由林

夕暮 舟羽の 生て や 舟 水 管

存義



探題 美紫 裕 慚  
松貞 虫半 幅

つゝるちと喰いて美紫や鞆る山 須史  
着くると竹茂まつ尺る裕り子 獨歩  
慚きぬる我みりる天地り如 木樺  
釣人み産のやまやまつ松魚 獅子  
風ふは吹けるあついかつあり 式棒  
かまろりや釣人の湯を穴へ打 李井

四月廿四日

獅子眠興行

題五月雨

五月雨や夢うと思ふ字は能山 存義  
あまのさみぬれ登る夢一々子 祇丞  
あまのさみぬれ登る夢一々子 買明  
さみぬれや月日星と鳴るも来凡 樓川  
さみぬれや月日星と鳴るも来凡 由林  
橋の蚊も流るり舞月面 雞口



探題  
於瓜 坂本梨 故き  
系極 早苗 扇

先妻死於瓜我友孫白ひり形 李井  
糸り赤さきもは日枝の山法師 須史  
帳も葉枝つくろきくさる故き瓜 獨歩  
系極や空に碧く江の曇 木揮  
谷多をいと秋ハ沈き早苗うさ 式棒  
日に喻あつまくれ赤おの扇哉 椰子

五月十九日

式棒庵興行

題瓜

瓜乃葉にかられて管小嵐うさ 存義  
ゆきあ子抱籠たれや赤葉瓜 祇丞  
むき〜理母鬼いと口や赤葉瓜 買明  
系よ実母出用乃色や瓜もけ 樓川  
持れと知る瓜盗人の白ひり形 鶏口  
映り若母瓜まいつくろ羽の家 由林



探題 蠅 子乙女 甲  
鮎 友木立 國府

邯鄲を蠅と記す時の寐さめり  
子乙女や日影を足さる孫小僧  
蓮生茂態谷めしつかりとふ  
子川みさかまく船の畫里哉  
洗を〜つゞき着連歌や友木立  
花葉の駕り都の國府とふ  
李井 須史 獨歩 木樺 獅子 式棒

五月廿六日

木樺庵興行

題蓮

拮く物志里教の蓮尺の卵 存義  
蓮清一人を寐起の渦り声 祇丞  
建出く蓮のうへの庵うたな 買明  
蓮のまや日を咲のほる池の果 樓川  
魚さ〜〜子寶珠子蓮子蒼哉 雞口  
深や〜ぬ蓮子こや〜せ曇衣 由林



探題

蝉 富士詣 白雨  
夕鳥 清水 牛婦人

暮つふは覚悟や蝉のうすくも色	李井
峰まきくに四季哉種みりり富士詣	須史
山面みちをさふまや浅間山	獨歩
夕鳥やまや夕鳥乃かこち顔	木樨
いづれよの秋落しけり清水哉	獅子
桃李とあいにほ誰か他王人牛婦人	式棒

六月十日

獨歩菴興行

題暑

町中み法螺吹くつるあつさうふ	存義
草葉まき世哉あちむく暑哉	祇丞
日哉さまは月を記音能阿つさ哉	樓川
神麴みむせきさうさる暑う那	雞口
去つまりて昼能鐘ゆく暑う那	由林
死よの然る古して居る暑う那	買明



探題涼

御遠涼

行ふに幕張敷くすみ家

李井

池涼

赤い青み磨ても池のまゝに哉

須史

湖水涼

矢指船泊る帆かけて夕涼

木樺

瀧涼

詠居て夜にかく水ん流のうゝ

獅子

川涼

ゆる瀬河方あさつまる河涼

式棒

海邊涼

むふみし里あゝ海や夕暮み

獨歩

六月廿六日

須史菴興行

題初秋

夕陽秋と知くく門掃く男う那

存義

初秋乃見付とく語や辰能刻

買明

夕秋や片枝ハ暑起百日那

樓川

夕秋来ぬと秋う起せし藤是哉

雞口

蝶既学み目さめつふ虫心秋

由林

夕つ秋や多葉粉の煙ちきれ行

祇丞



探題

梶 硯あひ 短冊作  
か袖立琴 乳糸

下書をみまの紙や梶の糸 李井

硯石あゝへま土佐乃海乃色 獨庵

号休みまきんさくか咲か 木樺

か寸袖を濡れつ八日かあけの落 柳子

糸る秋の夢か就池のあやま 式棒

転みせん祢ういの糸乃細くろ 須史

七月九日

李井庵興行

題お撲

夕月み西も赤も曠をあふ 祇丞

秋の夕暮あう架りう角力取 買明

胡延ま玉の汗を流お撲う那 樓川

弓杖の裸中一や猿をあふ 雞口

投くま西のかゝや乃羅漢連 由林

子越抱て新司にうや辻角力 存義

林



探題  
書椒 炮筆 幕  
旁 箱 素 卷 火

灯 燧 ぬい しま 草 や ち かり  
总 灯 籠 三 十 日 形 け ち う 那  
幕 や 夕 了 ぬ かい ぶ く 屋 垣  
常 年 ぬ 旁 燈 流 了 撞 楯 子  
明 川 や 稲 つ ま 戻 了 筑 波 山  
总 火 ぬ も 裏 越 忍 せ 少 亭 下 つ ぶ さ  
須 吏  
獨 歩  
木 樺  
獅 子  
式 棒  
李 井

物吟

かく 山 や 月 研 ぎ ぬ ず 電 子 空  
も 音 絶 へ へ 天 下 三 丸 丸  
中 越 着 て 坐 録 石 三 夕 丸 丸  
龍 眼 固 乃 肉 子 子 子 子  
さ 子 子 丸 丸 丸 丸 丸 丸 小 雷  
あ 子 子 丸 丸 丸 丸 丸 丸 古 池



楊弓<sup>ウ</sup> 孫弓のおさまる世<sup>ウ</sup> 老々々  
 親母かくれそ日くくく 孫里  
 音空く啼ぬうくく寸よよ  
 仙書を脊負あて上る石坂  
 雜行を名お和ききみり聖や  
 月と色いそん衣くくり  
 刈地<sup>ウ</sup> 臥<sup>ウ</sup> 呼<sup>ウ</sup> 時<sup>ウ</sup> 去<sup>ウ</sup> 子<sup>ウ</sup> 相<sup>ウ</sup> 虫<sup>ウ</sup> 秋  
 葉<sup>ウ</sup> 珍<sup>ウ</sup> 少<sup>ウ</sup> 日<sup>ウ</sup> 一<sup>ウ</sup> 日<sup>ウ</sup> 紅<sup>ウ</sup> 葉<sup>ウ</sup> 見

七月廿六日

獅子眠興行

題聖分

あふ子之れうち死しる聖分  
 あふ足ぬ小山の虫を聖分  
 行くみ<sup>ウ</sup> 強<sup>ウ</sup> 吹<sup>ウ</sup> つけ<sup>ウ</sup> 聖分  
 大<sup>ウ</sup> 葵<sup>ウ</sup> 色<sup>ウ</sup> 愛<sup>ウ</sup> み<sup>ウ</sup> ぬ<sup>ウ</sup> 女<sup>ウ</sup> 聖分  
 多<sup>ウ</sup> 深<sup>ウ</sup> 一<sup>ウ</sup> や<sup>ウ</sup> 聖分  
 蒼<sup>ウ</sup> あり<sup>ウ</sup> 一<sup>ウ</sup> 果<sup>ウ</sup> 一<sup>ウ</sup> 野<sup>ウ</sup> 分  
 伏<sup>ウ</sup> 草<sup>ウ</sup> 色

存義  
 祇丞  
 買明  
 樺川  
 由林  
 雞口



探題  
不登 草つき 初汐  
夜吟 下り築 秋布

むく 誰く 尸埋 ころ 巻 燈 火  
ま くら 起 や 鷓 より 惜 き 木 枝 尖 り  
初 汐 や 月 又 對 ころ 波 の 花  
朧 空 起 婦 の 毛 ぶ ころ 秋 を 満 り  
掛 ころ 曲 ころ 嵐 を ち め 那 ころ 築  
椎 乾 ころ 物 ぬ ころ 秋 の 面  
李井  
須史  
獨庵  
木樨  
弋棒  
獅子

八月十日

弋棒庵興行

題放生會

龍門を渡乃市城や放生會 存義  
木毛をぬくころいそ尺をる放生會 祇丞  
山坂哉流士乃焚く火や放生會 買明  
松花堂々絵を遊ぶ放生會 樓川  
今那死し鳥ハ啼きん放生會 雞口  
川あなくハ泥龜泣く放生會 由林



探題  
 新酒 添水 鶏頭  
 葛 蘭 麻

李 鞋のまゝ 丹 欠 赤る 新酒 哉  
 面 の 秋 ち 狂 つ け め じ ゅ 流 ら せ  
 ち 那 や ぶ ち 紅 や 鶴 尾 美  
 我 指 の 秋 の 雲 尺 よ 竹 子 葛  
 总 剪 し じ ゅ 蘭 の 詠 め ち  
 山 さ と や 茶 釜 黙 里 々 鹿 子 声  
 李 井  
 須 吏  
 獨 歩  
 木 樺  
 獅 子  
 式 棒

八月廿六日

木樺庵興行

題秋暮

極 冠 も 手 我 つ け け 秋 の 暮  
 一 蹻 立 て 四 方 我 搜 や 秋 の 水  
 湖 の う こ ね む ち 赤 ち け ち  
 船 ち け ち け ち け ち け ち け ち  
 け ち け ち け ち け ち け ち け ち  
 杖 子 を う ち て 八 鞠 を 蹴 ち け ち け ち  
 存 義  
 祇 丞  
 買 明  
 雞 口  
 由 林  
 樓 川



探題 雁菊 ちみち  
嘉 辻宮 ときた

歸りて来ていふくくや小田の唇 李井  
昔の紫を尾裁出も若よ菊也 須史  
飛喜ふ鳥我梭あてのみち也 獨歩  
風道 丹志はくときつやも子露 獅子  
初尾木も目にわろくや市辻宮 弋棒  
あの子をまふち髪あふ教<sup>花</sup>き 木樨

九月十日

獨歩庵興行

題后月

換やの蔓うけ絆や夜乃自 存義  
探幽をいっふくくん夜能自 祇丞  
統より紅葉赤花登十三歌 樓川  
ゆゝ秋忍んば与記僧も月の友 雞口  
尺のほや袖も薰夜乃く 申林  
くくくくくくくくくく十三歌 買明



探題

柚味噌 福刈きわ  
蜜柑 末枯 九月

多まへハ糸も軸と那花柚味噌式

李井

猶刈さうくやうちり浮市堂

須史

とめ山吹まくらみ石丸

木樨

順神の先一番子蜜柑り茶

獅子

菓のうちもくく枯みり菓嵐戸

式棒

聖者おの魚足てやらん九月

獨歩歩

九月廿日

須史庵興行

題雪

芦花葉乃覚悟アセり雪の暮

存義

雪哉出くゆきにころ着け渡舟

買明

まつ雪や大原舟をこる牛乳靴

樓川

初雪や夜きぬ山をき能あま

雞口

降つ毛や田面の鶴を雪乃杭

由林

まつ雪や梢をくく茶の飴

祇丞



探題

鴨十夜  
芭蕉急  
芭蕉紫

持ふを日私を言鴨始艶  
李井

子み為言哉さそく十夜のみ足  
獨歩

風也星波ゆみ物を松木山  
木樨

恩つむや為紫く山山土  
獅子

空菊みす角きく星月夜  
式棒

祿林の掃げともく為紫を  
須史

百韻

梅既か鯉み花咲みりり  
李井

戸内ともしせは苔取乃乃  
須史

恭平の旅み言位やもむん  
獨歩

酒さげなると月人の舞  
木樨

庵の額舩みん波書詠へ  
獅子

きく落斜まおとあし来を  
式棒



呼吸も沙々〜〜〜の友  
須史

〜〜〜と枕をなす  
李井

門を赤犬縁へて感産交  
木樺

いく暇きら〜〜の検校  
獨歩

君そ志き悲れぬる是れ因果經  
式棒

翠世廣の糸安洞〜〜  
獅子

羽蛾飛ぶをな〜〜古軒  
李井

〜〜子かけるるの〜首  
須史

〜〜る珠球〜〜後系里  
獨歩

小判と照〜寸秀吉能智恵  
木樺

椀飯を繰くつ繰くるを〜  
獅子

干鰯俵下〜東風吹〜  
式棒

深川の急舟三人り乃毅白塚  
須史

観てる眼我鼻哉見え  
李井

秋の萩能長雪隠下月名入  
式棒

蔓能き水〜〜南風之音  
獨歩



二  
糧そく落粟ひく首袋 木樺

飛脚造く 荒法師 獅子

吹降の振忠つ 留るを寐とやて 李井

あつ路の杉枝ゆきるかこら 木樺

出入りま志のふ乃山の乳児才 獨歩

緒よけなまぬ志ほくき様 須史

浮げ船子何是於夕日志つりま 獅子

子鳥の依り群 是 強 式樺

いのち猪の秤みかゝる市きちて 木樺

状子封をまね柳會津やま川 大黒 李井

は史くすくる厄を於目鏡掃く 須史

きくくへ男の梅のうしろ記 獅子

所く 善孤を於船の流 獨歩

二  
只さへ憎交 佐若子 関札 式樺

手能痛く集むとたくくニッ同哉 李井

枕うへへみ油あらし 木樺



教生母徳ふと母を密むせて 獅子

心素をうへるゝの増まるゝ 須史

錦木母垣も離れ折るゝ 式棒

袖の以て足る紙子おゝき 獨歩

長老の心も逢ひあはせぬ 木樨

火あこつゝ素合乃落 李井

落月哉木能宵も狭む 長柄山 須史

寐能く面うの鳥啼く秋 獨歩

對陣乃互に磨く米乃色 式棒

靈是能もゝ村の詔 木樨

咲かすむ永子貫能花の林 獅子

笠と取中の宵能きけり 須史

六十ありて飯みつく 日 向 獨歩

塔波より刻む日 向 材木 式棒

あゝ破舟破船の始終中を憂き 李井

引く夷をいとむ君 獅子



物かぬ人子戯水一葦子去き 木樺

ま〜〜〜とある盆子去き 獨歩

隠居家為田舎め紀ふ焚火し 須臾

猿と鳴る僕の木堂里 李井

〜鞭子の色もや思は方 式棒

此亭空に西角雨り色 木樺

子孫途捨る思はも 文<sup>取</sup> 獅子

優婆塞ふ〜 翁子お談 須臾

浴を盆盥みさむそ月子乳<sup>新</sup> 獨歩

土子食<sup>三</sup> 浴く蚯蚓啼く音 式棒

秋<sup>三</sup>の棺子ま〜 翁子 李井

忠子きゆまぬ老子金一歩 獅子

人形の上子人哉感〜 木樺

日結の顔を拭けも去子免 獨歩

中垣にちるほと成〜 あやめ子 須臾

お梅〜 新とさ〜 蛭<sup>延</sup> 李井







芥生より秋虫芙蓉能总使 式棒

粟扱く子等みよく訓水鶴 木樺

綿蓋能壇埭みくく船能月 李井

老方を籠み神の火多能屋 獅子

還音み翁さいし武者所 須臾

下郎の神と皆委謬既 木樺

魚みはく龜のちも庭の隈 式棒

戸垣をさくぬ温泉の音く 李井

論義みく山並坊哉あふるなる 獅子

箒て掃てやもく古足代衣 獨歩

天秤のむふまろ来る船日新 李井

比よアしし橋のそろき 式棒

大名を當籠持と花忍う那 木樺

百代たさまお江戸能長閑さ 須臾



寶曆六丙子春

書林

京堀川錦上町

西村市郎右衛門

江戸本町三丁目

西村源六版



